

2018
おもろ
チャレンジ

ウガンダで学ぶ、“国際協力”とその新しい可能性

農学部 2年

田畑 勇樹

ウガンダ

2018年8月17日-

2018年9月16日



渡航概要と内容

今回の渡航の目的は、NGO、青年海外協力隊などの国際協力活動の現場を実際に見たり、現地の孤児院併設学校で生活することで、以前から考えている“国際協力を仕事にする”という漠然とした目標に向かって、何が出来るかを考えて、今後の具体的な行動へつなげたいというものがあった。

実際の渡航はこの予定に加えて、さらにいくつかの団体や現地で活動されている方とお会いする機会をいただき、さらに充実したものになった。

8/17~8/25の間は、現在インターンをしている認定NPO法人テラ・ルネッサンスの活動地を訪問してまわった。テラ・ルネッサンスの活動地はウガンダに2カ所存在する。1つ目がウガンダ北部のグルという地域。ここはウガンダで起こった内戦で最も被害を受けたと言われる地域である。実際、多くの子どもたちが誘拐され、兵士として戦わされていた。その子ども兵たちが村に帰ってきて差別を受けたり、自分の力で生活することができなかつたりする。そんな元子ども兵の社会復帰を支援しているのだ。1年半の職業訓練の後、1年半実際お店を開いてビジネスを展開、3年で自立していくのである。もう一つは南スーダンの難民居住区にある自立支援施設である。南スーダンから100万人を超える難民がウガンダに流入している。その南スーダン難民の自立を支援する施設が居住区内にある。その二カ所を数日にわたって訪問し、授業を見学したり、元子ども兵である受益者や施設の卒業生の方にお話を聞くことができ、1週間、貴重な経験をすることができたツアーだった。

8/25~8/30

この日程では、JICAの職員の方のお話を聞かせていただけた。さらには首都から数時間バスで移動した田舎の村でコミュニティ開発の分野で活動している青年海外協力隊の方に訪問許可をい

ただくことができたので、その方をはじめ青年海外協力隊数人の方の任地を訪問し活動を見せていただいたり、協力隊の生活もを見せていただいたりした。村での村人たちとのリアルな交渉や、うまくいかない事例、うまくいっている事例などがあって興味深かった。そして幸運なことに、その地域で活動している現地 NGO もいくつか訪問させていただいた。

8/31~9/3

首都から少しバスで移動したところにある町で、ご縁をいただき、現地でご結婚されて生活している日本人の方の家でホームステイをさせていただき、ウガンダの歴史やリアルな生活など、多様なお話を聞きつつ、その地域に施設をもつ NGO を訪問したり、近くのゲストハウスで生活していた日本人のボランティアの方々とも交流したりし、国際協力について意見を交わすことができた。

9/4~5

ウガンダは就業人口の7割が農業をしているという農業大国でもある。農業関係の団体も訪問できたらという思いも叶って、ウガンダにある有名な米の研究機関を1日見学させていただき、JICAの米の専門家の方から貴重な講義を受けることができたり、その施設に勤める青年海外協力隊の稲作隊員の方に、米に関する実験を見せていただいたり、地域の農業組合を案内していただいた。また、稲作隊員の共同住宅にもお邪魔し、楽しいひとときを共有させていただいた。

9/6~8

観光も大事な時間だと思い、現地でお世話になった方や、日本からウガンダに渡航していた知り合いの方と、ウガンダを観光した。ナイル川のラフティングなど、有名な場所もいくつか行くことができたり、田舎の村を訪問しご飯をごちそうになったり。国際協力だけでなく、また違う視点でウガンダを見ることができ、非常に楽しみ、リフレッシュすることができた。

9/9~10

悪夢だった。当初の予定では、訪問を許可していただいた方の活動地へ移動する予定だったが、この前日から下痢と頭痛が始まり、ついには発熱。一時は40℃を超える熱が出てしまい、移動などとんでもなく、首都カンパラの知り合いの友人の方の家で寝込ませていただいた。繰り返す下痢と引き続く発熱を薬を飲んで2日間寝込んで気合いで治した。2日間を無駄にしてしまったことはとても残念だったが、これも一つの経験かと思っている。

9/11~14

偶然のご縁をいただき、この日程ではウガンダ南部の孤児院兼学校を訪問し、子どもたちと一緒に生活をさせていただいた。残念なことにこの期間、学校はターム休みだったため、農業のお手伝いをしたり、こどもたちと交流したりすることがメインであった。ここでは朝早くから掃除、水くみで1日が始まり、農業などをして働き、ご飯を食べて、夕方また水をくみにいって、ご飯をつくり、夜は満天の星空をみるといった生活だ。小さな子どもたちは働き者であり、たくまし

かった。水道もなければガスもない、停電も毎日のことだった。この施設での生活は本当に幸せだった、このような生活ができたこと、本当に嬉しい気持ちだった。ここでの数日が今後のこともゆっくり考えられるいい期間となった。

9/15

空港へ移動し帰国。



木工大工の訓練を受ける元少年兵の方々



洋裁の授業を受ける元少女兵の方々



体験談を話す元少女兵の方々



南スーダン難民居住区の風景



かまどを共同でつくるコミュニティ



青年海外協力隊員の方の村の風景



孤児院兼学校にて農業に励む子どもたちと先生



田舎の村で若者たちとしたサッカー



早朝の水汲みに向かう少年



首都にあるタクシーパークの様子

上で記した流れの中、部分部分で観光をしたり、ふらっと現地の方と交流できたり、ここで語りきることのできないいくつもの小さな物語がある。自然も、陽気な人も、街も、空気も、生活も、魅力的なことばかりで、完全にアフリカにハマってしまった。

感じたことは後ほど書くとして、苦労したこと、現地で起こったトラブルと対処法について。

・議員の逮捕に伴い、8月の後半はウガンダで暴動も起こっていた。外務省からの注意喚起のメールなども見ている、少し怖かった。(例えば、乗っていたバスの終着点で銃声がかかるからそこまで行くなと知り合いから電話がかかってきた)対処法は情報を常に受けとることができるようにすることかと思う。特に現地で、日本で使用しているスマホに加えて電話を入手し、知り合った方の電話番号を登録しておいたことがよかった。Wifiの下でしか使えないスマホだけでなく、もう一台(電話機能だけが)ケータイをもっていてかなり役に立った。

・交通事故が多い。首都周辺でのバイクや車の走行量など目で見るとすぐにわかるのだが、非常に危険だ。スピードを落としてくれとバイクタクシーの運転手には言い続けたが、危険に変わりはない。自転車事故のような感覚で起こる交通事故、実際一度バイク事故には巻き込まれたのだが。

・体調を崩したとき、病院体制や保険内容について前もって知っておくことの重要性を感じた。実際 40 度を超える発熱を経験し、知り合いの方に面倒を見てもらったのでよかったのだが、一人だと危なかったと思う。

日本から色々と薬をもっていたことが良かった。解熱剤や整腸剤などは、涙が出るほど役に立った。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

毎日が今までに体験したことのないような日々であり、新しい気づきや学びでいっぱいになり、感情が動き続けた 1 ヶ月だった。アフリカは常に教えてくれる場所だった。認定 NPO 法人テラ・ルネッサンスの活動地に行ったときは、紛争被害者への自立支援、南スーダンの難民に対する自立支援を見て、心身共に傷ついた人々が 3 年間をかけて経済的にも社会的にも自立していく、そのもう一度立ち上がっていく姿には大変感銘を受け、このようにアフリカで人の人生が変わっていくのを見て、このような仕事に対して、ただただ面白い！やりたい！と感じた。南スーダン難民居住区の受益者も「前は自分の人生に絶望していたけど今は希望をもっている」だったり、グルの施設の卒業生は、「私の洋裁の技術はすごいんだ！」と自信満々に答えていたり、今度は施設の後輩たちにアドバイスをしていたり、「地域の人が病気になったらおいしいご飯をつくってもっていく」など、自分には持ち合わせていないこの器の大きさや心の豊かさに、ただ教えられることばかりだった。

青年海外協力隊の方々にお世話になったときにも様々な現場を見ることができたが、二つ印象に残った村がある。1 つ目は井戸が壊れて遠くまで水をくみに行っていて、その村の様子を見に行ったとき。村長らしき人は、「自分たちはお金がないんだ。援助してくれ。県庁に伝えてくれ。この村は老人が多いのは見たらわかるだろ？」とまくし立てる。自分たちで収入を得る方法を隊員の方がいくつか提供するもののすべて却下。言っていることは間違っていないのはわかるのだが、話でよくきくようなシチュエーションだった。もう一つは村で少しずつお金を出し合って組合のようなものを形成してお互いにかまどを作り合っていた。それにしても働き者で朝からお昼を過ぎても休憩一つしない。働き者のコミュニティほどうまく回っていて、支援を待っているコミュニティほど貧しいという状況があるとは聞いていたが、まさにこのようなこと？を言うのかと浅はかではあるが感じざるを得なかった。その後もいくつかの NGO などを訪問し、知識面でもとても勉強になった。行く前は自分の興味を絞れたらよいと思っていたし、支援のあり方にもきっと自分がこれだと思える正解があると思っていた。だが違った。たくさんの景色を見れば見るほど自分の関心は広がり、こんな問題もあればあんな問題もあると自分の興味関心は広がっていくばかりだった。例えば、環境問題、首都カンパラ近郊では車検をしていない大量の車や

バイクが排気ガスを巻き散らかして走っていた。道路をつくれれば見栄えのいい支援にはなるが、そこを走る車が空気を悪くしては意味がないだろう。実際ずっとあの空気を吸うのはきついものがある。例えば、水の問題。安全な水にアクセスできない人々がたくさんいて、実際泥水を料理に使っておなかを壊している子どもたちがいたり。後はトイレもそうだ。虫もわいてお世辞でもきれいとは言えないトイレで用を足し、手を洗わずに食器を洗ったり。例をあげるとたくさんあり、そのたびに国際協力の可能性と難しさを感じる。変わっていくことは大事であるが、それ以上に変わらないことも大事という言葉をどこかで聞いたが、それも納得ができた。また支援のあり方に正解があるとは言えないと感じた。その場その場で分野を違えば街も違う、人も違う。その状況の中で大事なものは、その場その場で何が一番大事なのかを見極めて考えながらアクションを起こすこと、そして人ひとり一人に寄り添ってオーダーメイド型の支援を行えるようなしなやかな対応ができるかだと感じた。正解は見つからなかったし、それで良いのだと思った。最後に田舎の町にある孤児院兼学校で数日間の生活を送った。水道がないので、早朝と日が沈む前に1回ずつ子どもたちはポリタンクを自転車にくくりつけて水を汲みに行く。ガスがないのでかまどに火をおこし、薪を入れて調理を行う。(ご飯は畑でとってきた豆や芋類中心の基本自給自足)お風呂はポリタンクの水を節約しながら水浴び。電気も毎日のように停電。(水浴び中に停電がきても全く動じなくなってしまう)このような田舎の生活を送っていると(すべての田舎がこうかはわからない)感じるものがたくさんあって、その中でもやはり生きることは簡単ではない。日本で蛇口をひねって水が出る生活をしていては感じられないが、向こうでは水は重たい思いをして運んでやっと手に入るわけだし、ご飯も自分たちでプラントして育ててはじめて食べることができるし。こんなにもしっかり生きたことあんまりなかったと思った。なんとも素敵な生活なのだろうか。

ここまで、感じたこと、学んだことはありすぎて、へたくそな文章を散らかしてしまっただが、まとめると、あまり注目されないアフリカの魅力を1ヶ月ぐるぐるウガンダを回って感じ、そのたびたくさんのことをウガンダからも教えてもらうことができた。ますます自分としては国際協力活動にのめり込んでいきたいと強く思っている。こうなるとは全く予想していないことの連続の中、むかついたり、へこんだりすることも多くあったが、ウガンダ人の強靱でかつ自由なメンタリティーを見ていると不可能なんてないと感じさせられてしまいさえする。アフリカに戻って活動する日に向かって確実に生きる、本当にたくさんのことを学、感じる事ができる日々だった。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

1ヶ月の渡航を終えて、アフリカを出るときにはもう完全にアフリカにハマリ、戻りたいと思っていた。そして、国際協力活動も、実際に今回の自分は訪問者でしかない。だから近い将来現場でも活動しようと思っている。この経験をどう活かしていくかについては大きく四つ考えている。

1つ目は、国際協力に関わる、関わらないは置いておいて、ウガンダでの生活が楽しすぎて、完

全にアフリカにハマってしまった。可能な限り早くかつ、今度はもっと多くの国に長い期間行きたい。可能な選択肢について現在模索しているところである。

2つ目は、文章力である。今回のウガンダ渡航、SNS などを通じてたくさん発信したいと思っていた。しかし実際は、限られた語数でまとめて発信したり、どうしたら人に届く文章を書けるのだろうと悩んだり、結果あまり発信できていなかった。人の心に響く言葉をチョイスして、うまく文章を書けるように、ブログを始めて、文章力を磨きたい。次回の渡航など、ゆくゆくはブログで国際協力活動について多くの人に発信できればと考えている。

3つ目は、これから国際協力にのめり込んでいく中で、海外で活動したいが、日本で学生生活を送る中、日本でできる国際協力をしようと思った。何が一番重要か。現地で感じたのは、「お金」の重要性であった。お金がないからできないことがある、しかし、お金があればできることがある。お金があれば守ることができる人いる。お金があれば選択の幅は広がる。300円もあれば1日ご飯には困らず生活できる場所にて、日本での1000円の寄付がもつ力をようやく実感した。日本でできること、それはファンドレイジングである。資金調達の仕組みを1からとことん勉強し、知ることから始め実践したいと思っている。

4つ目は、経験を人に伝えるということ。複数回の報告会やイベントで話したいと考えている。今世界で起きていること、何ができるかを一人一人の人間が考えるとき、すべては知ることから始まるはずだ。だから多くの人にウガンダで見たもの、感じたことをガンガン伝えていき、その人たちの心を動かしていければと思っている。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

本プログラムは、海外に挑戦したいけど、資金が足りないという学生には本当にありがたいプログラムであると思う。海外での活動に強い思いがある人は絶対に応募すべきだと思う。迷っていても応募することは無駄ではないしそれをきっかけに選択肢も広がる。

■ 主な奨学金の使途

*渡航費

*交通費、宿泊費、食費 など

*スタディツアー諸費

*海外旅行保険、予防接種 など